The Japan Society of Educational Sociology

クールでの参与観察があるため，おもわずなるほどと納得してしまう。本書の価値もここにある。ここにいたって，筆者の論理構造がはっきりとする。カナダのハイスクールでおこなったことを，一定の行動様式を植えつける明文化されたカリキュラムと潜在的カリキュラムとして捉える視点である。この意味で，本書は教育社会学の研究書であり，教育社会学研究者への贈り物なのである。

今後，日本の学校研究においても，このような観察が次々にでてくることを期待したい。いやでてくるだろう。若い研究者なら，非常勤講師として学校に入り込むことは可能だろう。そんな研究の方向性を示唆することも，本書の優れた面である。

◆A5判　310頁　2,500円（税別）
学文社

■ 書　評 ■

竹内　洋［著］

『立身出世主義—近代日本のロマンと欲望—』

メディア教育開発センター　吉田　文

本書は，立身出世を軸とした近代日本精神史であり，『日本人の出世観』(1978)，「冷却イデオロギーの社会史」(『選抜社会』)(1988)，『立志・苦学・出世』(1991) などの一連の著作の延長に位置するものである。ある歴史的な事象を豊富な史料で裏付けし，それを最先端の社会学理論で縦横無尽に切ってみせる著者の手腕には，いつもながら敬服する。一般読者を引き付けて離さない面白さと，研究者の知的関心をかき立てる洞察力に富んだ分析との両方を兼ね備えた本書を，まず，手にとってページを開いてみることを強くおすすめしたい。

20年という歳月のなかで，テーマとしての「立身出世」の切り口は，少しずつ変化してきている。立身出世のさまざまなタイプを析出し，それを加熱と冷却という分析枠で時代的な流れの中に位置づけた作業（『日本人の出生観』，「冷却イデオロギーの社会史」）から，立身出世を目指す者が突き当たらねばならない受験の過程に焦点が当てられるようになり（『立志・苦学・出世』），本書では，立身出世を，学校教育を経由して上昇移動することと定義して（「勉強立身」），受験，学校生活，卒業後の社会的処遇などをめぐる心性が説き明かされている。

教育への着目度が高くなり，立身出世を教育との関連で分析しているのが，本書の特徴の一つである。教育を媒介とした社会的上昇移動のコンセプトについて6つのタイプを提示しているが，そのうち，日本は，成功は階級という属性ではなく個人の業績によって導かれるものであり，その個人の業績は，生得的な能力ではなく後天的な努力，それも勉強による努力だという観念が支配的な社会(「努



NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology



力＝教育主義」）にあたるという。

これまでの著作と比較した本書のメリットは，勉強・受験を通じての立身出世に特定したことで，そのイデオロギーを内面化していた主体が見えるようになったことにある。その主体とは，「受験生」，「学歴貴族」，「新中流階級」，「受験家族」などである。雑誌メディアにあらわれた社会規範としての立身出世の分析から一歩進んで，そうした社会規範が誰によってどのように受け止められたかの分析にシフトすることで，規範とその受容のされ方との関係が明らかになり社会的なリアリティが増している。

また，一方で，教育を媒介としてなされる階層の再生産と，他方で，そのサイクルに参入を目指す者の途切れることのない供給（「高等小学校現象」や「苦学力行」）の両側面が明らかにされており，評者には，立身出世がなぜ近代日本において機能し続けたのかという問いへの解答の手掛かりが用意されているように思える。

立身出世に彩られた近代も，やがて終焉を迎える。昭和40年代頃からの受験の大衆化により，受験という装置が立身出世イデオロギーと結びついて機能しなくなったことを指摘し，ポスト・モダンの時代の到来とみるのである。

本書を読み終えて目を閉じると，立身出世の光と陰が鮮やかなコントラストでよみがえり，物語を読んだというよりは壮大な立身出世絵巻を見たかのような感を覚える。ところで，そのストーリーを思い返してみると，特定の場面設定がなされていなかったが，まぎれもなく東京の物語であることに気づく。新中流階級も，独学・苦学する青年も皆，東京居住者である。近代日本を特徴づける「勉強立身」は，東京を中心として展開したことをもっと強調する必要があるように思う。

なぜなら，それによって農村部や地方の小都市における立身出世の別のストーリーに道を開くことができるからである。「立身出世主義」が，社会の上層から下層へ，都市から農村へとその裾野を拡大していったとき，最後までそれに染まらない人々，すなわち高等小学校や中等教育への進学が都会熱や立身出世熱に由来しての行動ではなかった旧中間層の存在や，その彼らもやがては受験大衆化に組み込まれていったことについての物語があれば，「立身出世主義」一枚岩ではない，近代日本の重層化した構造が浮き彫りになるのではないだろうか。

歴史分析においては，「なぜ」という問い答える作業ほど難しいことはない。それでも，「立身出世」は，なぜ，日本の近代化過程を通じて主要な社会規範でありえたのか，言い換えれば，なぜ多くの人々が，「努力＝教育主義」を内面化して，受験や進学に向かったのかと問いかけたくなる。著者は，一つの解答を提示している。それは，「零落の不安」が強迫観念となって人々と立身出世に駆り立てたが，その不安が小さくなった「豊かさのアノミー」状況にある現代では，立身出世を炊き付けられなくなったというものである。このかぎりでは説明は一貫している。

ただし，その「零落の不安」の根拠は



NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

雑誌メディアに求められており，当時のメディアの流通範囲の問題や，人々がすべてそれを内面化したかどうかという疑問が残る。それよりも，日本が近代化を開始してきわめて短期間に教育を普及させたという事実に照らしてみたとき，立身出世主義を持続的に加熱できた社会構造的な要因についての言及があってもよいのではと思われる。

たとえば，社会階層間にきわだった文化的差異が見られなかったこと，近代学校の文化が欧米文化中心であり，特定の社会階層の文化との関係が希薄であったこと，したがって，教育を媒介とした移動のサイクルに絶えず新たな参入者がいたために階層的な再生産が明示的でなかったことなどについて，歴史的史料をつないだトータルな説明が欲しい。

誰にとっても，学校が忌避する場ではなかったこと，さらにその学校は，学力だけにもとづく公平な競争の場であったこと，努力＝教育主義が生まれた土壌はこうした近代日本の特質に大きく由来していることがもっと強調されてもよい。

そうすることで，著書のいうポスト・モダンは，豊かさがわれわれの意識を変えたという以上に，社会の構造的な転換によるものなのかについての検討が可能でないかと思うのだが，それは評者の欲張りというものかもしれない。

◆文庫　336頁　1,020円（税別）
ＮＨＫ出版



NII-Electronic Library Service